

実践 曾於市立財部北小学校

1 はじめに

本校区は、曾於市の北部に位置し、北に霧島連山を望み、杉・桧の森林が広がる自然豊かな地にある、児童数 16 人の極小規模校である。また、教育に対する関心も高く、大変協力的な校区である。板三味線「ゴットン」の名手『荒武タミ』氏ゆかりの地としても有名で、学校でも教育活動の中にその演奏活動を取り入れ、全校児童が熱心に練習し、学校内外でも発表している。「地域の中の学校」として地域の信頼も厚く、全教育活動において、地域の支援を生かした活動を積極的に取り入れ、読書活動においても地域の協力を得た実践を行ってきている。

2 活動の実際

(1) 読書新聞作りを通じた交流

読書単元の授業において新聞作りを行った。児童に一番書かせたいのは、自分の感想の部分である。高学年においては筆者の意図に対して自分の考えを書くという学習活動が重要視されている。そこで新聞にして意欲的に取り組めるようにした。新聞にすることの良さとしては、意欲の持続以外に字数制限があることで大切なことを的確に焦点化することができることや、紙面が見やすくなり、児童が読みたくなることがあげられる。「新聞を読もう」等の教材でリード文や小見出しの役割も学習する。児童は単元始めに、教材文を読んだ初発の感想を書いた。最初はよくわからない、面白くないという感想が書かれていた。しかし、新聞を書き進める中でその面白さにだんだん気づき、新聞の感想欄(コラム欄)に書き加えていくことができた。次に児童同士で発表し合い、それについて意見の交換をした。

新聞作りをする中で、自分の意見を友だちと交流し、高い意欲を持続しながら活動を進めることができた。数の限られた中でまとめることで、考えや要点を焦点化でき、友だちの書いた新聞にも興味をもって意見交流することができた。

(2) キャッチフレーズでの本の紹介

読んだ本の紹介文を書くに当たって、児童にその本のお薦めのところを意識させるために、本のキャッチフレーズを考えさせた。児童は「友だちにも是非読んでほしい」という観点で、その本の中で筆者の言いたいことや自分が一番感動したところを考えるようになった。児童が書いた実際のキャッチフレーズの例として、「この本を読むと植物にくわしくなるよ」「『(引用)なんのへんてつもない空き地の草むらを豊かな虫の世界にかえることができます。』この言葉ひかれませんか。」など本の主題に迫るようなキャッチフレーズを考えることができた。本を紹介するに当たっては理由も必ず付けるようにした。

並行読書で読んできた本を、キャッチフレーズにまとめたり、理由を入れた紹介文ワークシートでまとめさせたりすることで、目的をもって読むようになり、今まであまり触れたことのない本のジャンルにも興味をもって読むようになった。



付箋紙を使って感想などを
書き加えていった新聞。



感想について発表し合
った意見交流。

(3) 読書後の感想交流

全学年，児童が自分の好きな本やお薦めの本を紹介し合った。紹介の時間は，本校で週2回組んでいる朝の集いの時間を利用した。児童は予め自分のお薦めの本と，その本についての自分のお薦めポイントや気に入ったところを枠に書いておいた。それを朝の集いに持ってきて，全校児童の前で紹介し合った。その後，お薦めの本を本立てに飾り図書室に全児童分並べた。（本立ては手作りの本立てで全児童分を作った。）並べてある本は通常どおりに貸出もできる。図書室に並べたその日から，友だちが紹介する本を借りている児童がいた。借りなくても図書や休み時間に本を広げて見るという姿も見られた。

本を並べて一か月半ほどしてから自分が読んだ本の感想を書き，再び感想交流をした。紹介された児童は自分が好きな本を読んでくれたことや，感想を書いてくれたことに喜びの表情を浮かべていた。

さらに，読書に関心を持ってもらうために，お薦めの本を紹介し合った。全校児童の前でお薦め本を紹介し合うことで，今まで読んだことのないジャンルの本にも興味関心が広がった。本だけでなく，友だちがどんな本を読んでいるのかということにも関心を持つようになった。

(4) 「ふれあい授業参加」の実施

本校は少人数のため，多様な意見を出し合う話し合い活動の授業がしにくい状況にある。そこで，地域の「学校応援団」の方々に協力いただき，子ども役となって授業に参加し，話し合い活動で意見を言ってもらっている。子どもと“ふれあい”ながら授業に参加してもらっているため，本校では「ふれあい授業参加」と呼んでいる。

授業の際は，教科書の教材について筆者の考えに対する自分の考えについて，理由を挙げて意見交流を行う。それぞれの筆者の考えに対して自分はどのような意見を持ったのか，自分自身の経験をもとに意見交流を行った。

児童は，地域の方々との意見交流をもとに，自分の考えを深めたり広げたりすることができるという学習のねらいを達成することができた。地域の方々にとっては，学校の図書室を利用し本に親しむとともに，自分の考えをまとめる機会となり，生涯学習の気運も高めることができた。

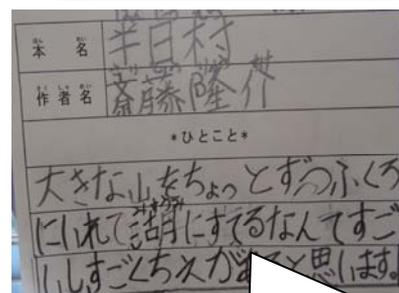
3 おわりに

このような活動を行ってきた結果，児童の読書冊数が増えてきており，図書室に親しみをもって通うとともに，本を借りて読むことが日常の姿となってきている。また，他者との交流を授業の中に取り入れることで，「友だちに紹介するために読む」，「生き物の共通性を探するために読む」など目的を意識した本の読み方ができるようになった。そして，「ふれあい授業参加」を実施することで，児童は多様な意見を活発に交流することができた。

今後は，親子読書の研修を深めたり，親子読書グループの結成による主体的・日常的な親子読書活動を進めたりして，家庭での読書の充実も推進したい。



児童一人一人専用の「お薦めの本」コーナーを設置。



「お薦めの本コーナー」で，自分の気に入ったところを紹介している様子。



「学校応援団」の方々に前に堂々と発表する子どもたち。